

平成20年度農林水産情報交流ネットワーク事業 地方調査 農村地域における生物の保全に関する意識調査結果

この調査は、平成20年10月上旬から10月下旬に、農林水産情報交流ネットワーク事業のモニターのうち、九州在住の農業者モニター369名、消費者モニター198名に対して実施し、農業者モニター318名、消費者モニター186名から回答を得た結果である。
以下、農業者モニターは「農業者」、消費者モニターは「消費者」という。

【調査結果の概要】

1 農村地域における生物の保全に関する農業者の意識

(1) 生物多様性の現状に関する意識

—「農村地域で見られる生物が以前より少なくなったと思う」が8割—

農村地域で見られる生物の種類や数が以前（10～20年前）と比べて「少なくなったと思う」が53.5%、「どちらかといえば、少なくなったと思う」が28.6%となっており、8割の農業者が少なくなったと回答した。

少なくなったと思う理由については、「作物の生産を優先し農薬や肥料を使用したから」が65.9%と最も多く、次いで「住宅地の建設や水路の水質が悪化するなど社会的な変化や生活様式が変化したから」が59.8%、「経済性や効率性を優先し農地・水路整備などを実施したから」が58.2%となっている。

一方「少なくなったと思わない」は9.1%、「どちらかといえば、少なくなったとは思わない」は6.6%となっており、その理由としては、「生物に配慮し減農薬・減肥料などの環境保全型農業を実施しているから」が82.0%と最も多く、次いで「周辺の生息環境が悪化する中で、生物が生息しやすい環境が残されているから」が70.0%となっている。

図1-1 生物多様性の現状に関する意識

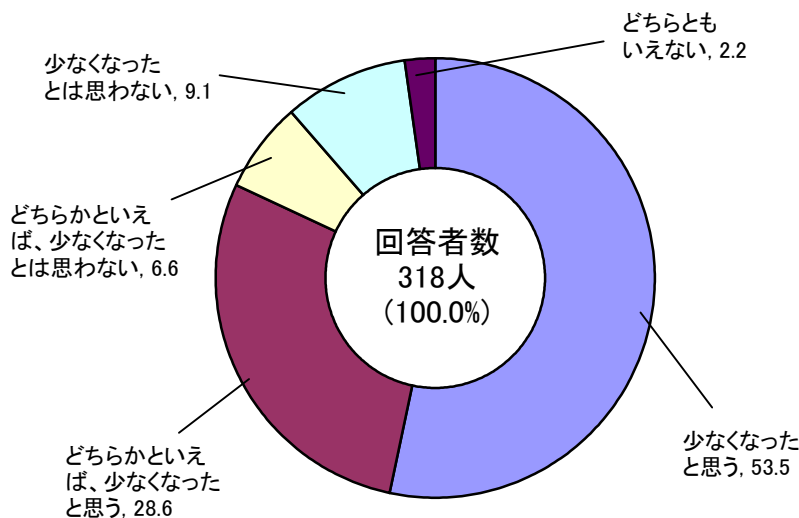


図1-2 少なくなったと思う理由（複数回答）

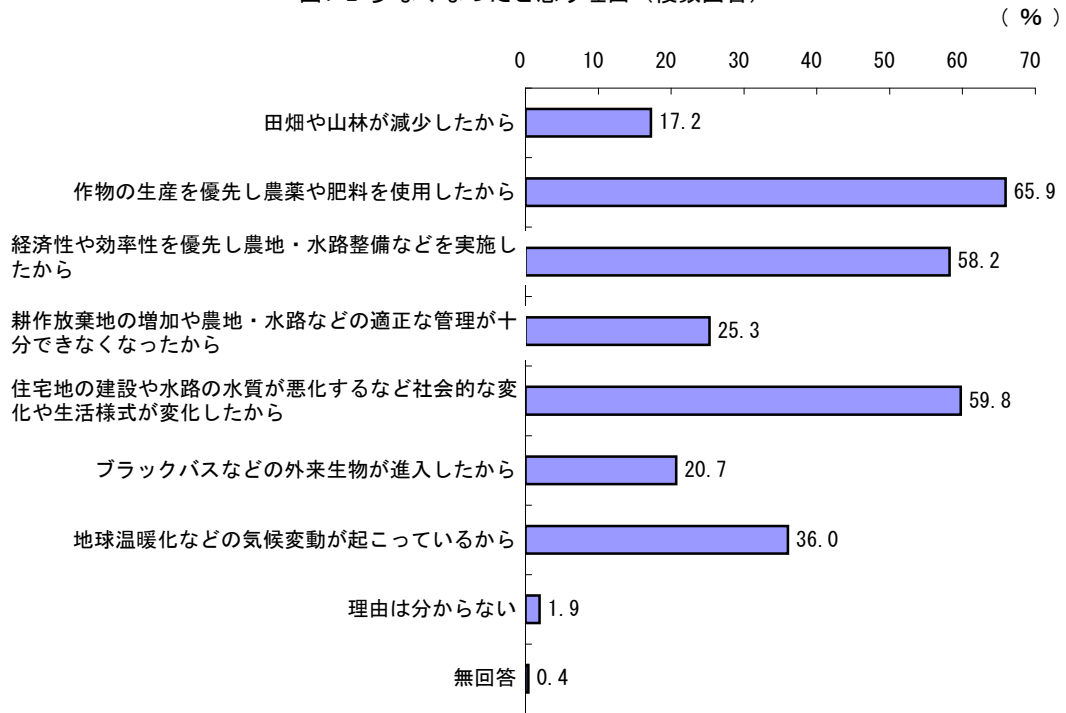
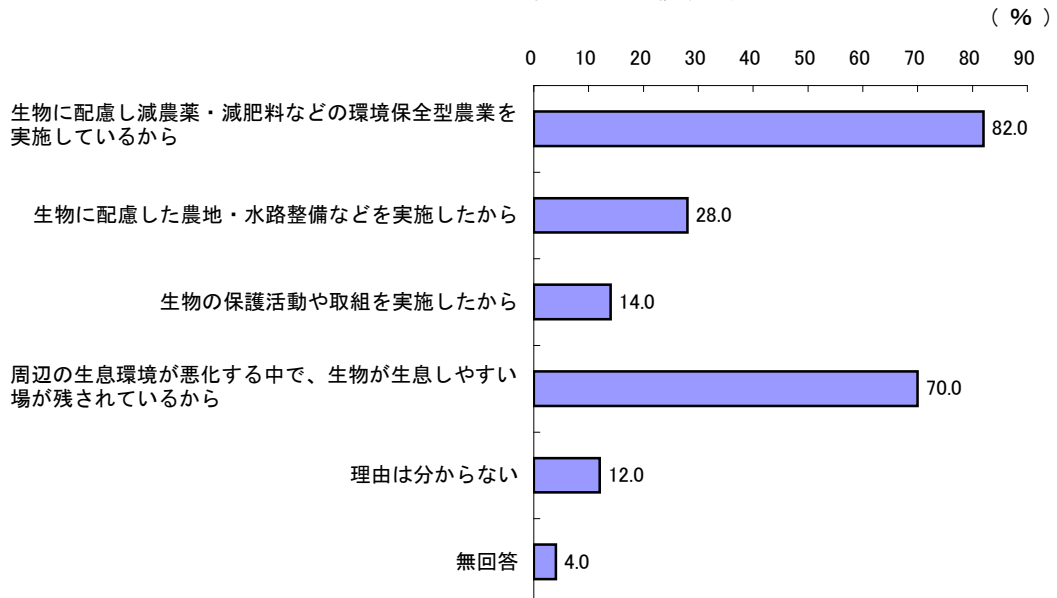


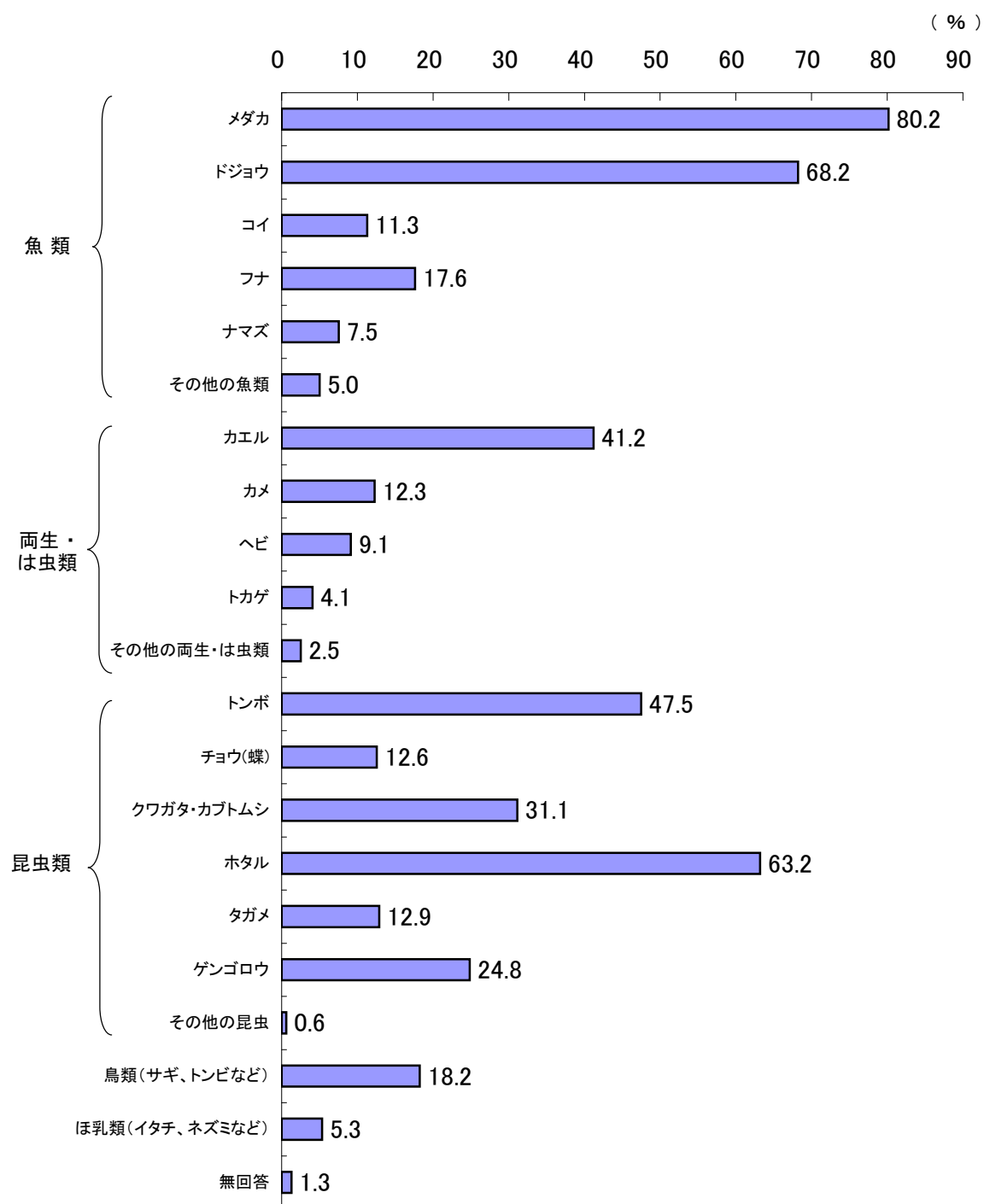
図1-3 少なくなったと思わない理由（複数回答）



—農業者に「印象（記憶）のある生物」は、メダカ、ドジョウ、ホタル、トンボ、カエル—

農村地域でどのような生物が印象（記憶）にあるかについては、「メダカ」が80.2%と最も多く、次いで「ドジョウ」が68.2%、「ホタル」が63.2%、「トンボ」が47.5%、「カエル」が41.2%となっている。

図2 農村地域で印象（記憶）にある生物（複数回答）

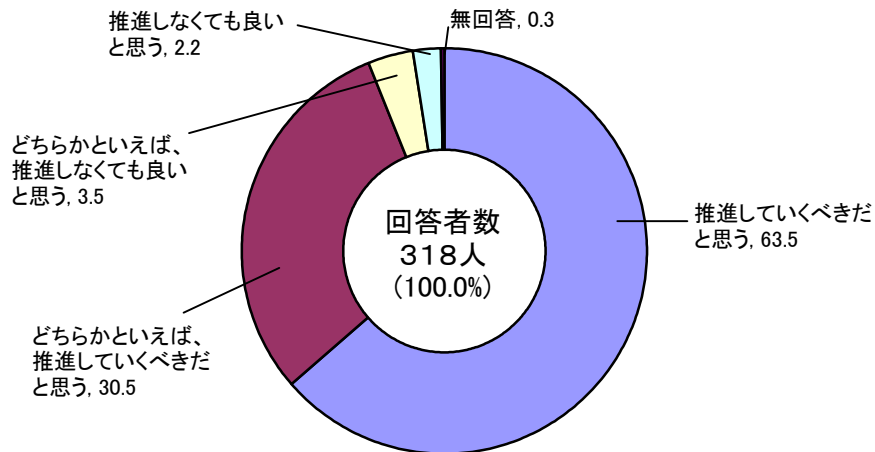


(2) 生物多様性の保全の政策に関する意識

—「生物多様性の保全を推進していくべき」が9割—

農林水産省が生物多様性保全を推進していることについては、「推進していくべきだ
と思う」が63.5%、「どちらかといえば、推進していくべきだと思う」が30.5%となっ
ており、9割の農業者が「推進していくべき」と回答した。

図3 農林水産省が生物多様性保全を推進していることをどう思うかについて



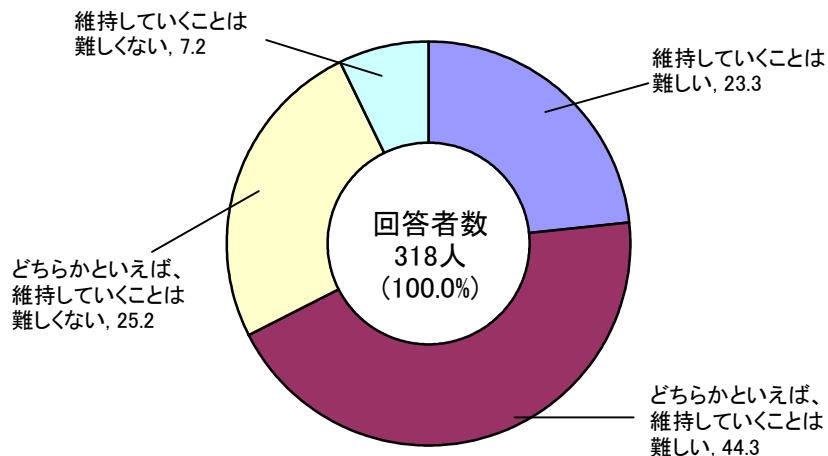
(3) 生物多様性の保全に関する意識

—「多様な生物を維持していくことは難しい」が7割—

農村地域の多様な生物を将来にわたって維持していくことについては、「維持してい
くことは難しい」が23.3%、「どちらかといえば、維持していくことは難しい」が44.3%
となっており、7割の農業者が「維持していくことは難しい」と回答した。

一方、「維持していくことは難しい」は7.2%、「どちらかといえば、維持してい
くことは難しい」は25.2%となっている。

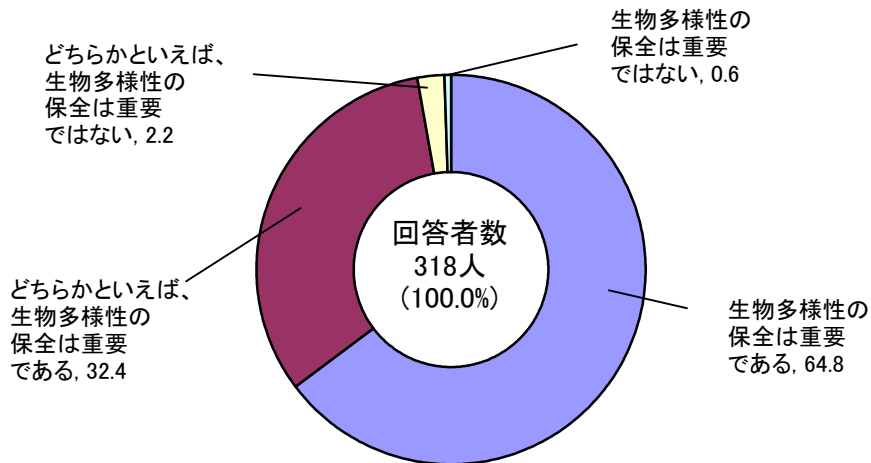
図4 農村地域の多様な生物を維持していくことについて



—「生物多様性の保全が重要」が、ほとんどを占める—

農村地域で様々な生物が生息できる環境を維持し、生物多様性を保全することについては、「生物多様性の保全は重要である」が64.8%、「どちらかといえば、生物多様性の保全は重要である」が32.4%となっており、ほとんどの農業者が「生物多様性の保全は重要である」と回答した。

図5 農村地域で様々な生物が生息できる環境を維持し、生物多様性を保全することについて



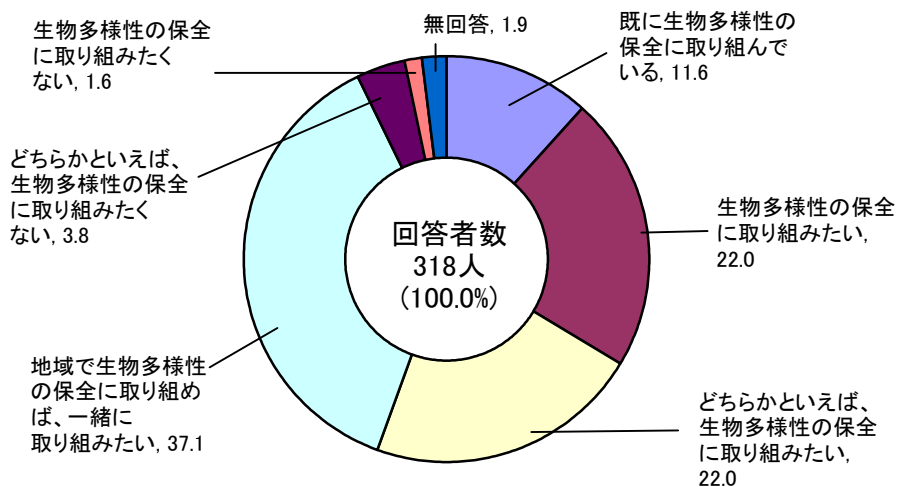
(4) 生物多様性の取組・連携・課題に関する意識

—「生物多様性の保全に取り組んでいる」は1割、「生物多様性の保全に取り組みたい」は8割—

生物多様性の保全に取り組みたいかについては、「既に生物多様性の保全に取り組んでいる」が11.6%となっている。

また「生物多様性の保全に取り組みたい」が22.0%、「どちらかといえば、生物多様性の保全に取り組みたい」が22.0%、「地域で生物多様性の保全に取り組めば、一緒に取り組みたい」が37.1%となっており、8割の農業者が「取り組みたい」と回答した。

図6 生物多様性の保全に取り組みたいかについて



—「農業者以外の人とも連携・協力したい」が9割—

生物多様性を保全するためには、農業者以外の人(団体)とも連携・協力したいかについては、「農業者以外の人とも連携・協力したい」が44.0%、「どちらかといえば、農業者以外の人とも連携・協力したい」が46.9%となっており、9割の農業者が「農業者以外の人とも連携・協力したい」と回答した。

「農業者以外の人とも連携・協力したい」と回答した農業者がどんな人(団体)と協力・連携したいと思うかについては、「地域住民(集落内の非農家等)」が72.3%と最も多く、次いで「地域の教育機関(小・中学校、高校)」が36.7%、「地域の農業関連団体(農業協同組合、農業委員会、土地改良区)」が30.4%、「行政機関(市町村、県、国)」が29.1%となっている。

図7-1 生物多様性を保全するために農業者以外の人と連携・協力したいかについて

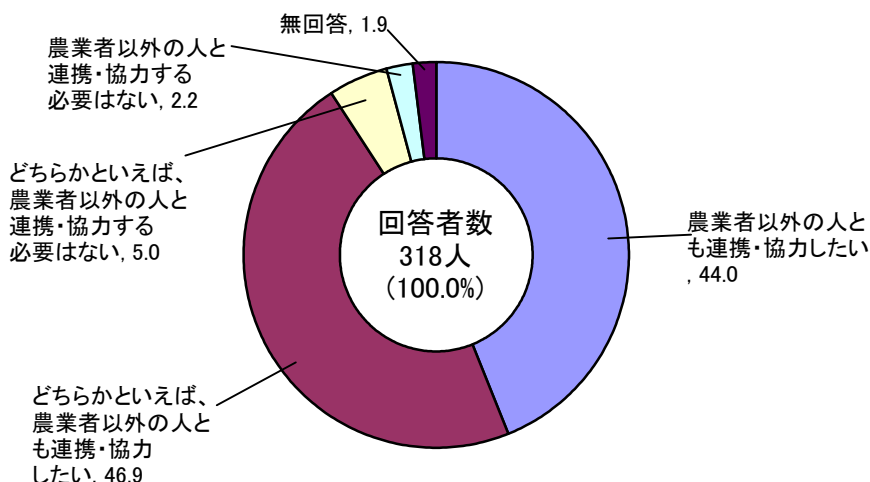
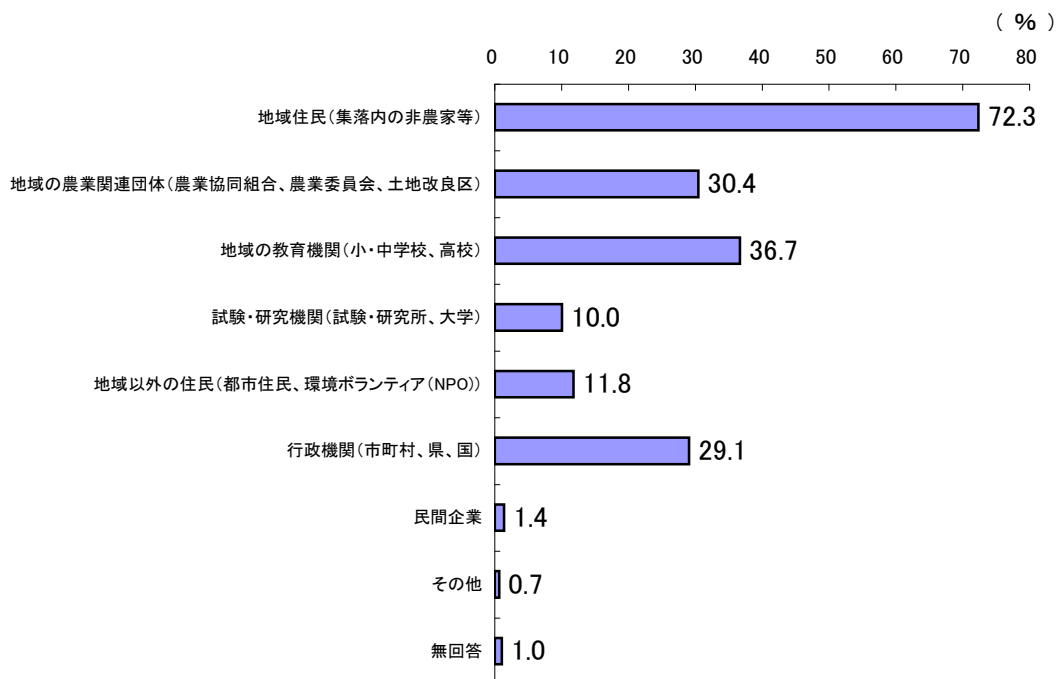


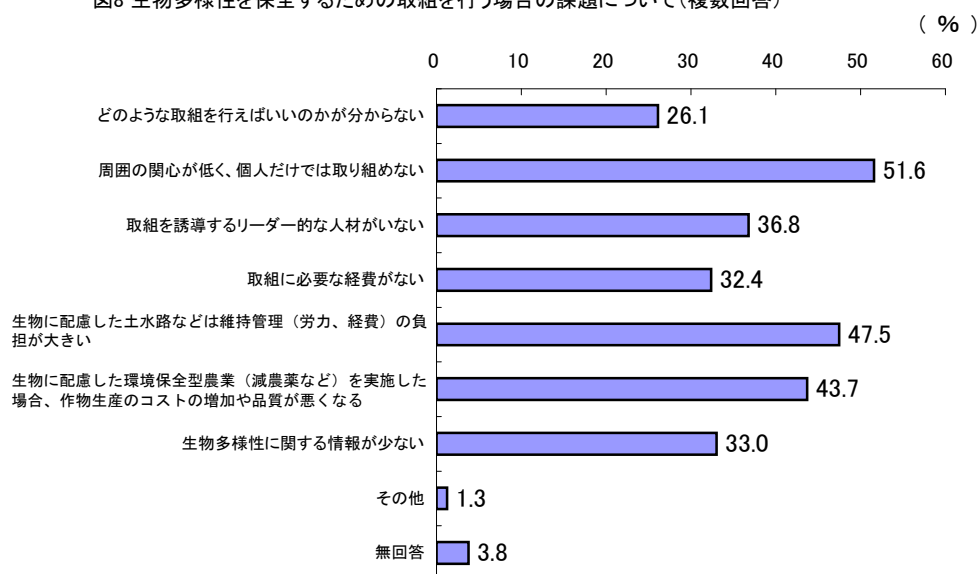
図7-2 どんな人と連携したいか(複数回答)



—生物多様性を保全するための課題は、「協力」、「維持管理」、「作物生産のコストと品質」—

農業者にとって、生物多様性を保全するための取組を行う場合の課題は何かについては、「周囲の関心が低く、個人だけでは取り組めない」が51.6%と最も多く、次いで「生物に配慮した土水路などは維持管理（労力、経費）の負担が大きい」が47.5%、「生物に配慮した環境保全型農業（減農薬など）を実施した場合、作物生産のコストの増加や品質が悪くなる」が43.7%となっている。

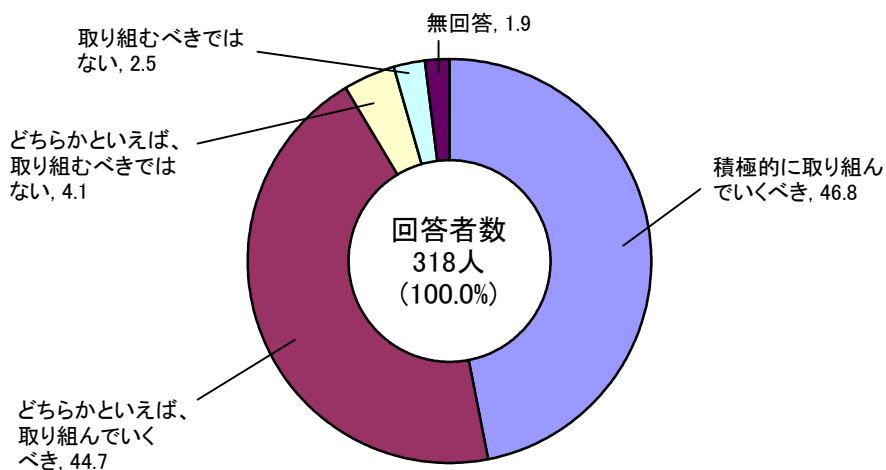
図8 生物多様性を保全するための取組を行う場合の課題について(複数回答)



—「生物に配慮した農作物の販売を取り組むべき」が9割—

生物の生息・生育環境に配慮し、田んぼや水路に生物が生息しやすくしたり、農薬使用などを少なくして栽培された農作物を「生物が生息できるほど良い環境で栽培された農産物」として、例えば、「メダカ米」などの名称で、販売されている取組を農作物の販売戦略の一つとしていくことについてどう考えているかについては、「積極的に取り組んでいくべき」が46.8%、「どちらかといえば、取り組んでいくべき」が44.7%となっており、9割の農業者が「取り組んでいくべき」と回答した。

図9 生物に配慮した農作物を販売することについて

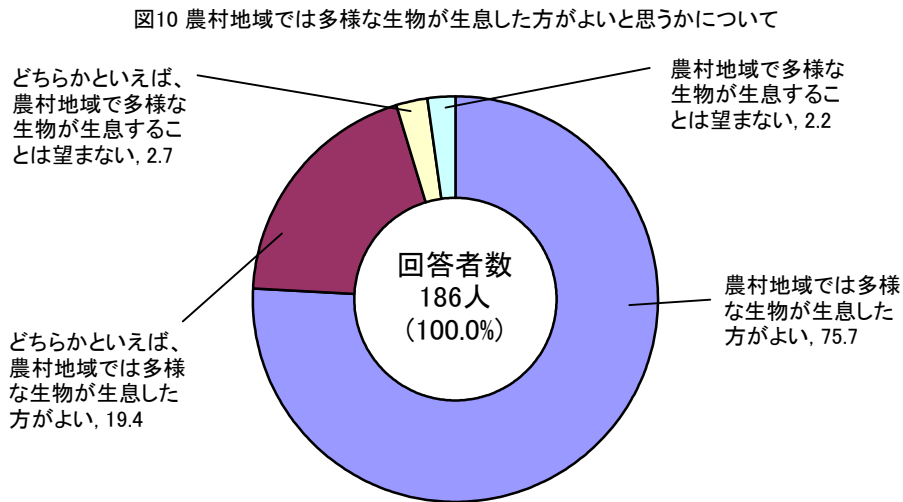


2 農村地域における生物の保全に関する消費者の意識

(1) 生物多様性の現状に関する意識

—「農村地域で多様な生物が生息した方がよい」が、ほとんどを占める—

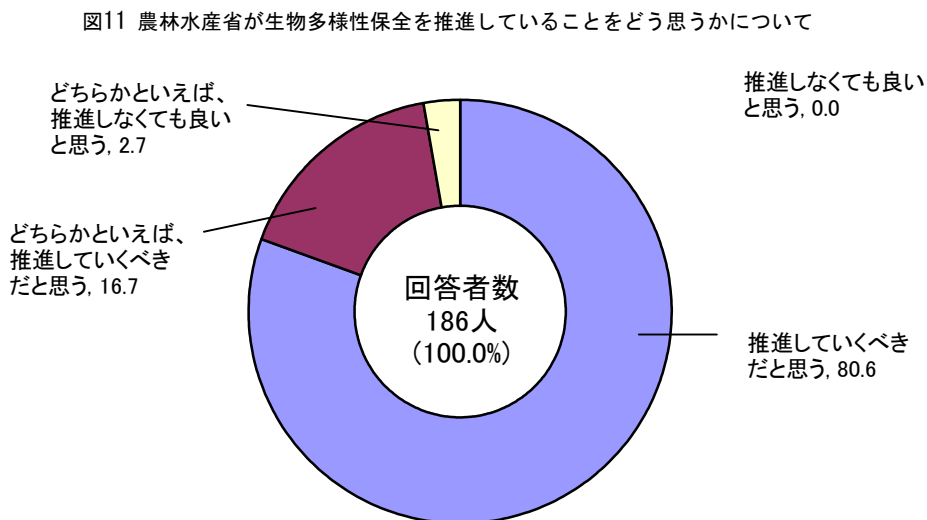
農村地域では、多様な生物（魚類、昆虫、鳥類など）が生息した方がよいと思うかについては、「農村地域では多様な生物が生息した方がよい」が75.7%、「どちらかといえば、農村地域では多様な生物が生息した方がよい」が19.4%となっており、ほとんどの消費者が「多様な生物が生息した方がよい」と回答した。



(2) 生物多様性の保全の政策・取組に関する意識

—「生物多様性の保全を推進していくべき」が、ほとんどを占める—

農林水産省が生物多様性保全を推進していることについては、「推進していくべきだ」と思うが80.6%、「どちらかといえば、推進していくべきだ」と思うが16.7%となっており、ほとんどの消費者が「推進していくべき」と回答した。

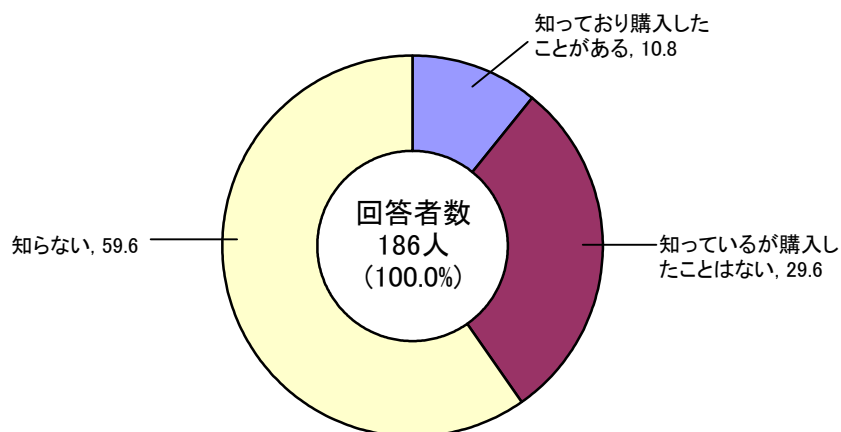


—「生物に配慮して栽培された農作物を知らない」が6割—

生物の生息・生育環境に配慮し、田んぼや水路に生物が生息しやすくしたり、農薬使用などを少なくして栽培された農作物を「生物が生息できるほど良い環境で栽培された農産物」として、例えば、「メダカ米」などの名称で、販売されていることを知っているかについては、6割の消費者が「知らない」と回答した。

一方、「知っているが購入したことはない」は29.6%、「知っており購入したことがある」は10.8%となっている。

図12 生物に配慮した農作物が販売されていることを知っているかについて



(3) 生物に配慮した農作物に関する意識

—「生物に配慮した農作物を購入したい」が、ほとんどを占める—

生物に配慮した農作物を購入したいと思うかについては、「購入したいと思う」が48.4%、「どちらかといえば、購入したいと思う」が49.4%となっており、ほとんどの消費者が「購入したい」と回答した。また、「購入したい」と思う理由については、「安全で健康にも良いと思うから」が81.3%と最も多く、次いで「環境に配慮した農業者を応援したいと思うから」が64.3%となっている。

一方、「購入したいと思わない」は2.2%となっているが、その理由については、「価格が高いと思うから」、「購入または試食する機会がないから」がともに50.0%となっている。

図13-1 生物に配慮した農作物を購入したいかについて

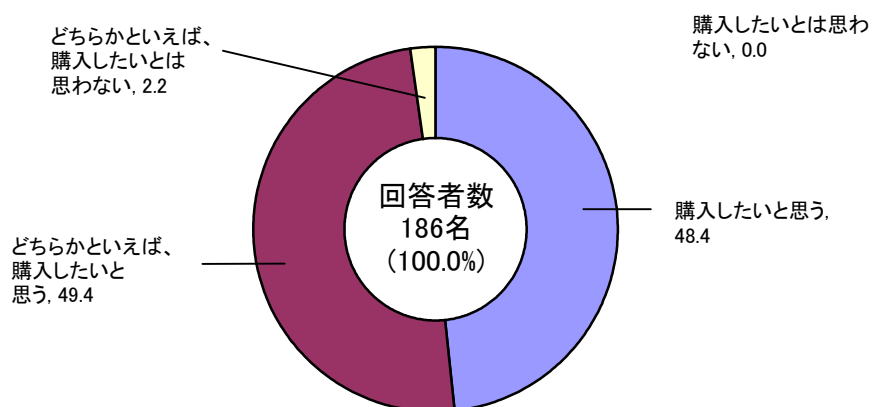


図13-2 購入したいと思う理由について(複数回答)

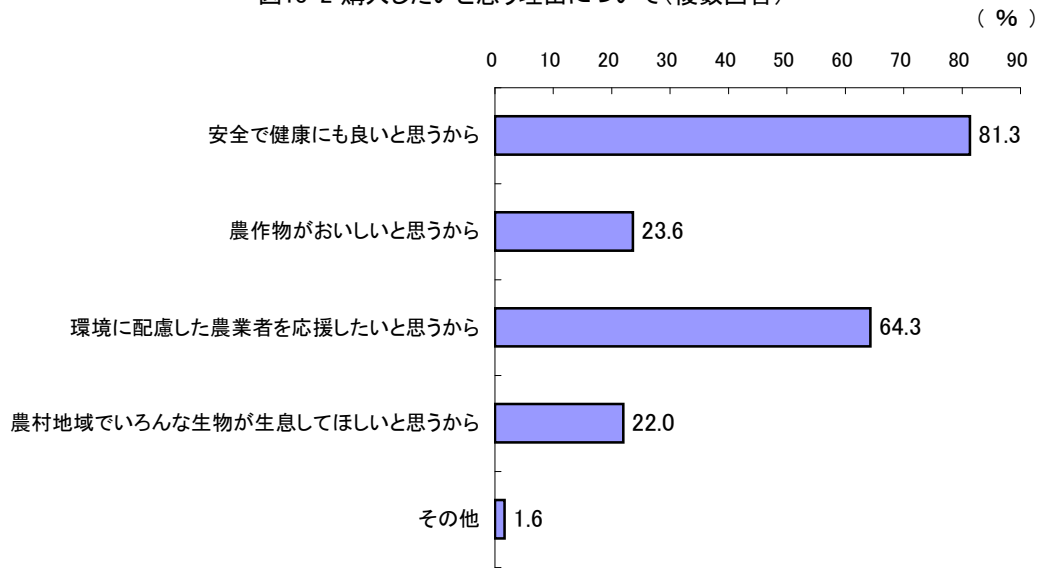
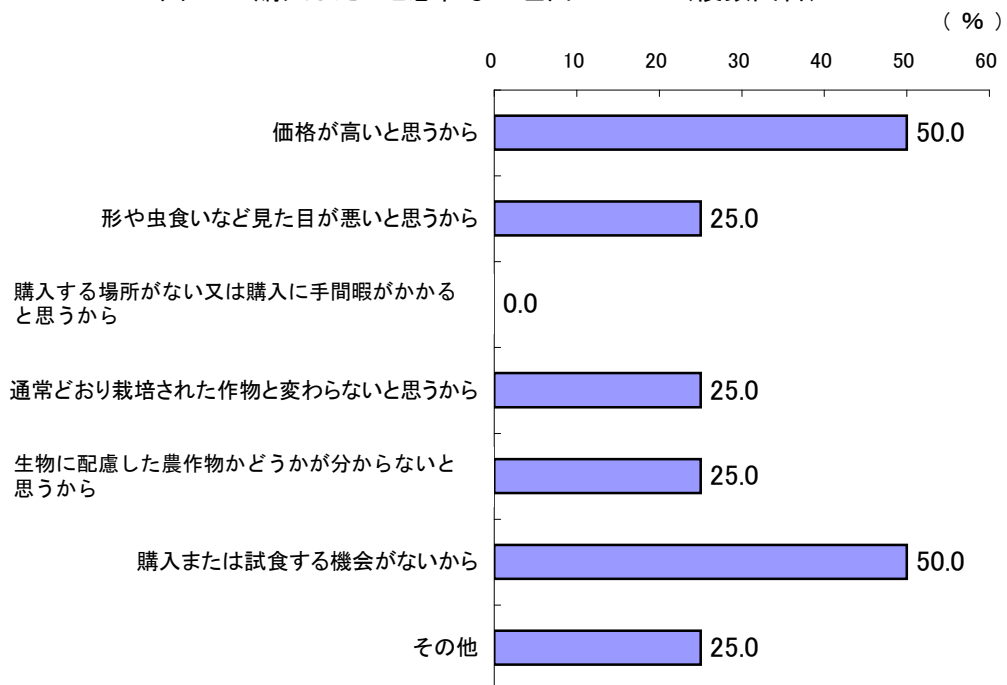


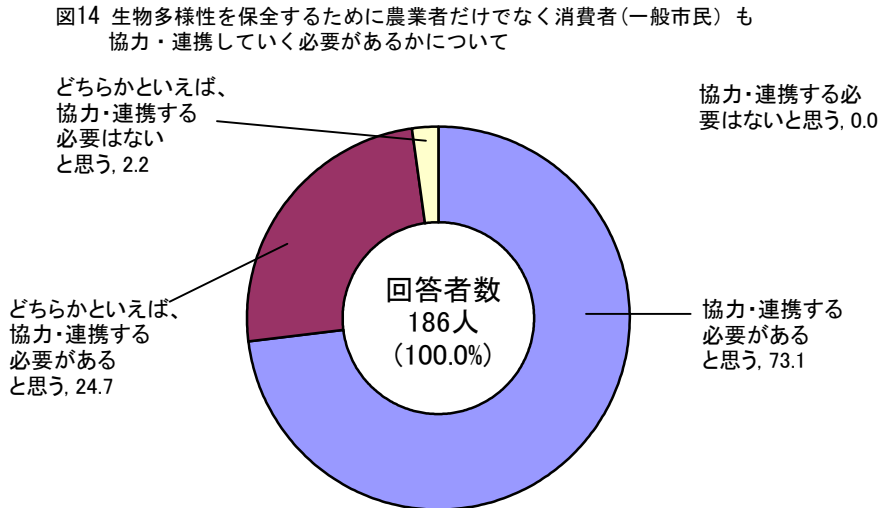
図13-3 購入したいと思わない理由について(複数回答)



(4) 生物多様性の取組への参加に関する意識

—「生物多様性の取組に消費者も協力・連携する必要がある」が、ほとんどを占める—

生物多様性を保全するためには、農業者だけでなく消費者（一般市民）も協力・連携していく必要があると思うかについては、「協力・連携する必要があると思う」が73.1%、「どちらかといえば、協力・連携する必要があると思う」が24.7%となっており、ほとんどの消費者が「協力・連携する必要があると思う」と回答した。



—「生物多様性を保全するための取組に参加したい」が4割—

農村地域の生物多様性を保全するための取組に参加したいと思うかについては、「参加したいと思う」が30.6%、「ときどきは参加したいと思う」が12.9%となっており、4割の消費者が参加したいと回答した。また、「取組の内容によっては参加したいと思う」が53.8%となっている。

農村地域での生物多様性を保全する取組として、どのような取組であれば参加したいと思うかについては、「取組農家の生産した農産物を購入することでの支援」が60.2%と最も多く、次いで「生物の収集（魚釣り、昆虫採取など）や鑑賞（ホタル狩りなど）」が37.1%、「水田や水路などの生きもの調査（生物調査・観察会）」が30.6%となっている。

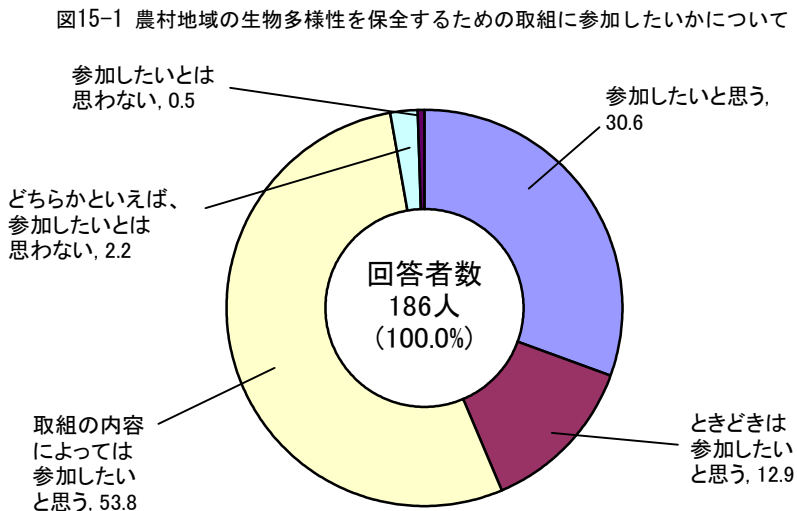


図15-2 どのような取組であれば参加したいと思うかについて（複数回答）

